令和４年度（前期日程）

入学者選抜学力検査問題

国　　語

（国語総合・現代文Ｂ・古典Ｂ）

試　験　時　間　　120 分

文学部，教育学部，法学部，医学部（保健学科看護学専攻）

問　題	ページ
一～四	1～11

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この冊子を開いてはいけません。
2. **各解答紙の２箇所に受験番号を必ず記入しなさい。**
   なお，解答紙には，必要事項以外は記入してはいけません。
3. **解答は，必ず解答紙の指定された場所に記入しなさい。**
4. 試験開始後，この冊子又は解答紙に落丁・乱丁及び印刷の不鮮明な箇所などがあれば，手を挙げて監督者に知らせなさい。
5. この冊子の白紙と余白部分は，適宜下書きに使用してもかまいません。
6. この冊子をとめている針金は，解答時に取りはずしてもかまいません。
7. 試験終了後，解答紙は持ち帰ってはいけません。
8. 試験終了後，この冊子は持ち帰りなさい。

※この冊子の中に解答紙が挟み込んであります。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

オープンダイアローグという言葉をご存じだろうか。一九八〇年代から、フィンランドのとある地方病院で行なわれてきた、対話による治療法のことである。治療の対象は、もともとの急性期の統合失調症に限らず、うつ病や家庭内暴力、依存症にも効くのではないかと言われている。

「開かれた対話」という直訳からもわかるように、ここでは患者（＝当事者）本人だけでなく、その家族や友人知人、医師や看護師、心理士ら、本人にかかわるさまざまな立場の人々が集まり、チームで対話を重ねてゆく。すると投薬や入院による治療よりも、なぜか治療成績が良いというのだ。日本ではひきこもりの支援・治療・啓蒙活動で知られる精神科医の斎藤環氏が①［　　］振り役となって、「オープンダイアローグ・ネットワーク・ジャパン」が組織されるに至っている。

あるいは犯罪加害者がその被害者と対話する「修復的司法」という取り組みもある。両者が直接会って話す以外にも、家族や地域住民らを交えて話しあう場合もあり、被害者は、加害者から謝罪の気持ちなどを聞くことで、「傷ついた気持ちから立ち直るきっかけ」をつかみ、また加害者は、「被害者の声を聞いて罪の重さを実感し、内省を深めて再犯防止につなげる」効果があるという（中日新聞、二〇二〇年一二月三日朝刊）。

このように医療や司法の場で「対話」が注目を集めている。その効果が期待され、必要性が説かれる。とはいえ、私たちはその実、対話を行ない得ているだろうか。望ましいもの、必要なものとして喧伝されるということは、実際には私たちが対話できていないということの証なのではないか。『〈対話〉のない社会』、『対話のレッスン』、『対話する社会へ』――これらはいずれもこの二〇年余りの間にこの国で刊行された本の書名である。

会話であれば、私たちはさほどその難しさを感じない（むろん夫婦の会話や親子の会話が少ないことに悩みを抱えている人も多いことだろう）。劇作家の平田オリザ氏の言葉を借りれば、会話とは、「価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり」（『わかりあえないことから』講談社現代新書）のことであり、私たちは子どもの頃から家で親やきょうだいらと、学校では友達や先生らと、そして職場では同僚らと飲食などをともにしつつ会話を楽しんできたはずだ。近さや親しさといった同質性を前提としているので、うまくそのノリに合わせられない人々を「コミュ障」という不安に陥らせているというべつの問題はあるにしても。

討論や議論も、それらがたとえばディベート教育や社内での議論といった文脈で用いられるように、そのコウセツ㋐がある人にとっては課題となったり、あるいは性格的な向き不向きはあるにせよ、対話ほど困難さを覚える人は少ないだろう。ちなみに物理学者のデヴィッド・ボームは、「ディスカッション（discussion）」が、「打楽器（percussion）」や「脳震盪（concussion）」と同じ語源を持つことを指摘したうえで、「ディスカッションはピンポンのようなもので、人々は考えをあちこちに打っている状態だ」とイメージ豊かに「議論」を定義している（『ダイアロー

グ』英治出版)。

では対話はなぜ、会話や討論、議論とちがって、実現しにくいのだろう。平田氏は対話を「あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは親しい人同士でも、価値観が異なるときに起こるその摺(す)りあわせ」と定義したうえで、会話を対話へと変える要素として「他者」の存在を挙げている。そしてディベートとのちがいをも踏まえつつ、「異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度」を「対話的な精神」だと説いていた(『わかりあえないことから』)。

だとすれば、対話の困難さとは、異なる価値観や見解の摺りあわせ、および自分の意見を変えることの難しさと同義であると言ってよいはずだ。異なる価値観を摺りあわせるには、お互いが歩み寄らねばならない。しかし、互いに「これだけは譲れない」という点があった場合、歩み寄りはなかなかうまく進みはしない。かりに私が歩み寄ったとしても、相手が意見をまったく変えなければ、それは対話ではなく討論(あるいは説得)と呼ぶべき事態である。歩み寄りに疲れて、両者の溝に目を瞑(つむ)ったとたん、そこからの言葉のやりとりは、対話ではなく、むしろ会話だろう。対話は会話と討論とのはざまで居心地悪そうに身をすくめている。

②その意味で、プラトンの対話篇(へん)は対話の困難さをいわば象徴的に描き出した作品と言える。というのも、ソクラテス自身は知への飽くなきカツボウ(イ)に駆られ、じつに粘り強く、自分と考えを異にする他者らと対話しようと試みているのだが、その対話はともすると、彼が自説を滔々(とうとう)と述べつつ問いかけをし、相手が「そうです」「そのようです」「まったくです」と同意を示す、問答形式となっている場合が案外多いからだ。その結果、ソクラテスは対話の相手はもとより、アテナイ市民らの恨みをも買ってしまったのだから、対話は危険なものとすら見なし得る。

ボームも指摘するように、「ダイアローグ(dialogue)」という語はギリシャ語のdialogosに由来し、logosが「言葉」を、diaは「〜を通して」を意味する。ゆえに、「対話は二人の間だけでなく、何人の間でも可能なものなのだ。対話の精神が存在すれば、一人でも自分自身と対話できる」と彼は言う(『ダイアローグ』)。

けれども、自問自答や自己内対話も意外と難しい。なかなか自分自身と距離を取る(あるいは私の中に他者を棲(す)まわす)ことができないからだ。堂々めぐりに陥ってしまったという経験は誰でも一度はあるだろう。

その点、複数の人々が集まってチームで対話を行なうオープンダイアローグや修復的司法は、立場を異にする「他者」の導入がごく自然になされている点が注目に値する。先に摺りあわせの難しさを指摘したが、二者間だと相手の言い分になかなか納得がいかない場合でも、それがべつの第三者の口から発せられると、思いのほか素直に受け入れられるものである。三人以上でなされる対話は、二者間でのそれよりも開かれていて、そのことで煮詰まることや自説への固着を回避してくれもする。「対」のイメージもあって、私たちは対話というと二者でのやりとりをつい

イメージしがちだが、③その囚われから自由になってみてもいい。

なぜ、開かれた対話はうまくいくのか。オープンダイアローグの理論的な背景の一つである「ポリフォニー」の概念がシサを与えてくれる。ミハイル・バフチンがドストエフスキーの小説の特徴として指摘していた「多声性」と訳される語だ。つまり、その作品では「複数の個性や運命が単一の作者の意識の光に照らされた単一の客観的な世界の中で展開されてゆく」のではなく、「それぞれの世界を持った複数の対等な意識が、各自の独立性を保ったまま、何らかの事件というまとまりの中に織り込まれてゆく」というのである（『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫）。オープンダイアローグが開かれた対話を志向するのは、当事者だけでなく、その人に関与するさまざまな立場の他者の声を共存させようとするからにほかならない。斎藤氏は、ポリフォニーはハーモニー（調和）ではないと釘を刺しているが、（二者間であれ、三人以上のであれ）うまく成り立っているときの対話は、各々の価値観や見解を異にする複数の声がその空間の中で、それでも対等に（ときには対立しつつも）共存しあっているときにこそ生じるのだろう。

自分と異なる価値観や見解の相違を尊重すること。とはいえ、「人それぞれ」で簡単に済ませず、互いに歩み寄れる地点を探り、そのための労をオしまないこと。第三者にも場を開き、他者の多様な声に耳を澄ませ、自分の考えが変わることを潔しとすること。対話をし続けるにはじつにさまざまな手間ヒマや面倒が伴う。しかし、それらは私たちが「共生」を名ばかりの理念としないためにも欠かせない作法であることは疑い得ない。

（三浦隆宏「共生の作法としての対話」による）

問一　傍線部㋐から㋔の片仮名を漢字に直せ。

問二　傍線部①は、空欄に漢字一字が入って「先導的な役目」のことを表す語句となる。空欄に入るべき漢字を書け。

問三　傍線部②について、筆者がこのように述べる理由をわかりやすく説明せよ。

問四　傍線部③を文脈に沿って言い換えたものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　三人での対話の有効性を視野に入れるのもいい
イ　対話の人数についての固定観念から脱却するのもいい
ウ　古い考え方は捨ててなるべく多人数で対話をするのもいい
エ　一人でも自分自身と自己内対話ができるよう心がけるのもいい
オ　言葉を介してさえいればすべて対話なのだと気楽に捉えるのもいい

問五　筆者は「開かれた対話」が成立するにはどのようなことが必要だと述べているか。わかりやすく説明せよ。

二

次の文章は、ある小説の一部である。主人公の「私」は、金閣寺に住み込みで働く徒弟であり、自分の容貌と吃音を気に病んでいる。読んで、後の問に答えよ。

さて私は、金閣周辺の掃除をすますと、ようやく暑熱を加えてくる朝日を避けて、裏山へ入って、夕佳亭へむかう小径を登った。開園前の時間であるから、人影はどこにもなかった。多分舞鶴の航空隊のそれらしい戦闘機の一編隊が、金閣の上を可成低空で、圧えつける轟きを残して去った。

裏の山中に、藻におおわれた寂しい沼、安民沢というのがあった。池中に小島があり、白蛇塚と呼ばれる一基の五重の石塔が立っていた。そのあたりの朝は、鳥のさえずりがかまびすしく、鳥の姿は見えないで、林全体が囀っていた。

池の手前には夏草の繁みがある。小径は低い柵で以て、その草地を劃している。そこに白いシャツの少年が寝ころんでいた。かたわらの低い楓の樹には、熊手が凭せてある。

少年はそこらに漂っていた夏の朝のしめやかな空気をえぐるような勢いで身を起したが、私を見て、

「何だ、君か」

と言った。

鶴川というその少年には、昨夜紹介されたばかりであった。鶴川の家は東京近郊の裕福な寺で、学資も小遣も食糧も潤沢に家から送られ、ただ徒弟の修業を味わわせるために、住職の縁故で金閣寺に預けられているのであった。夏休みを帰省していたのが、早目に昨夜帰ってきたのである。水際立った東京弁を話す鶴川は、秋からは臨済学院中学で私と同級になる筈で、その口早な［A］な話しぶりが、昨夜すでに私を怖気づかせていた。

そして今も、「何だ君か」と云われると、私の口は言葉を失った。が、私の無言が、彼には一種の非難のように解されたらしかった。

「いいんだよ、そんなにまじめに掃除なんかしなくても。どうせ見物が来れば汚されちゃうんだし、それに見物の数も少ないんだから」

私は一寸笑った。こうして私の無意識に洩らす仕様事ない笑いが、或る人には親しみの種子になるらしい。私はそんな風に、いつも自分が人に与える印象の細目にわたって、責任を持つことができないのである。

私は柵をまたいで、鶴川の傍らに腰を下ろした。また寝ころんだ鶴川の頭へまわした腕は、外側が可成日に焦けているのに、内側は静脈が透けて見えるほどに白かった。そこに朝日の木洩れ陽が、草の薄青い影を散らしていた。直感で、私には、この少年はおそらく私のようには金閣を愛さないだろうということがわかった。私はいつか金閣への偏執を、ひとえに自分の醜さのせいにしていたからである。

「お父さんが亡くなったんだってねえ」

「うん」

鶴川は素速く瞳をめぐらして、少年らしい推理に熱中していることを隠さずに、
「君が金閣がとても好きなのは、あれを見ると、お父さんを思い出すからなのかい？　たとえばお父さんが金閣がとても好きだった、というようなわけで」
この半分当っている推理も、私の［　B　］な顔つきにまるで変化を与えていないことを感じた私は、それが一寸嬉しかった。鶴川は、人間の感情を、昆虫の標本を作ることの好きな少年がよくそうするように、自分の部屋の小綺麗な小抽斗にきちんと分類しておいて、時々それをとりだして実地にためしてみると謂った趣味があるらしかった。
「お父さんが亡くなって、ずいぶん悲しかったろうねえ。それで、君、淋しそうなところがあるんだねえ。ゆうべはじめて会ったときからそう思ったよ」
私は何の反撥をも感じないで、こう云われると、自分が淋しく見えたという相手の感想から、或る安心と自由を贏ち得て、言葉がすらりと出た。
①「何も悲しいことあらへん」
鶴川はうるさそうなほど長い睫を押しあげて、こちらを見た。
「へえ……それじゃ君は、お父さんを憎んでいたの？　少くとも、きらいだったの？」
「おこってなんかいいへんし、きらいでもなし……」
「へえ、それでどうして悲しくないのか？」
「何となく、やな」
「わからん」
鶴川は難問に逢著して、草の上に坐り直した。
「それなら、ほかにもっと悲しいことでもあったのかな」
「何や、わからへん」
と私は言った。言ってから、私は人に疑問を起させるのがどうして好きなのかと反省した。私自身にとってはそれは疑問でも何でもない。自明の事柄である。私の感情にも、※吃音があったのだ。私の感情はいつも間に合わない。その結果、父の死という事件と、悲しみという感情とが、別々の、孤立した、お互いに結びつかず犯し合わぬもののように思われる。一寸した時間のずれ、一寸した遅れが、いつも私の感情と事件とをばらばらな、おそらくそれが本質的なばらばらな状態に引き戻してしまう。私の悲しみというものがあったら、それはおそらく、何の事件にも動機にもかかわりなく、突発的に、理由もなく私を襲うであろう。……
……又しても私は、こういう凡てを、目前の新しい友に説明できずに終った。鶴川はとうとう笑い出した。
「へえ、変ってるんだなあ」
彼のシャツの白い腹が波立った。そこに動いている木洩れ陽が私を幸福にした。こいつのシャツの皺みたいに、私の人生は皺が寄っている。しかしこのシャツは何と白く光っているだろう、皺が寄っているままに。……②もしかすると私も？

（三島由紀夫『金閣寺』による）

（注）吃音……発声時に第一音が円滑に出なかったり、ある音を繰り返したり伸ばしたり、無音が続いたりする言語障害。

問六　空欄 A ・ B に入る語として、最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えよ。

空欄 A に入る語　ア　快活　イ　穏健　ウ　柔和

空欄 B に入る語　エ　無関心　オ　無感動　カ　無教養

問七　傍線部①について、「私」が「悲し」くないのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問八　傍線部②について、「私」は何を期待しているのか。「皺」が意味するもの、および「私」の人物像をふまえて、わかりやすく説明せよ。

三

次の文章は、阿仏尼の日記の一部である。失恋した作者は、衝動的に髪を切るが、仏道に専念できず、各所を漂泊しながら養父の家まで旅をする。読んで、後の問に答えよ。

※この国になりては、大きなる川いと多し。鳴海の浦の潮干潟、音に聞きけるよりもおもしろく、浜千鳥むらむらに飛び渡りて、※蜑のしわざに年ふりにける※塩竈どもの、思ひ思ひにゆがみ立てたる姿ども、見慣れず珍しき心地するにも、思ふ事なくて都の友にもうち具したる身ならましかばと、①人知れぬ心の中のみさまざま苦しくて、

これやさはいかになるみの浦なれば②思ふかたには遠ざかるらむ

※三河国八橋といふ所を見れば、③これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もただ一つぞ見ゆる。※かきつばた多かる所と聞きしかども、あたりの草も皆枯れたる頃なればにや、それかと見ゆる草木もなし。※業平の朝臣の「※はるばるきぬる」と歎きけんも思ひ出でらるれど、「つましあれば」にや、さればさらんと、④少しをかしくなりぬ。

都出でて遥かになりぬれば、※かの国の中にもなりぬ。※浜名の浦ぞおもしろき所なりける。波荒き潮の海路、のどかなる湖の落ち居たるけぢめに、はるばると生ひ続きたる松の木立など、⑤絵にかかまほしくぞ見ゆる。

（阿仏尼『うたたね』による）

（注）この国……尾張国（現在の愛知県西部）。
蜑のしわざ……漁民の生業。
塩竈……塩を採るために海水を煮つめるかまど。
三河国八橋……現在の愛知県知立市のあたり。『伊勢物語』第九段には「橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける」とある。
かきつばた……アヤメ科の多年草。
業平の朝臣……平安初期の歌人、在原業平。古来より、『伊勢物語』で東下りをした主人公と目されてきた。
はるばるきぬる……「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」（『伊勢物語』第九段）の句。
かの国……遠江国（現在の静岡県西部）。養父の家があった。
浜名の浦……浜名湖の岸辺。

問九　傍線部①とは、具体的にどのような気持ちか。本文に即して説明せよ。

問十　傍線部②は、どこを指すか。本文中の語句で答えよ。

問十一　傍線部③、⑤を現代語訳せよ。

問十二　二重傍線部「らるれ」を文法的に説明せよ。

問十三　傍線部④について、作者が「をかしく」なった理由を本文に即して説明せよ。

四

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし、送り仮名を一部省略してある。

子※墨子謂程※子曰、「①儒之道足以喪※天下者□政焉。儒以天為不明、以鬼為不神、天※鬼不説。此足以喪天下。又厚※葬久喪、重為※棺椁、多為衣衾、送死若※徙。三年哭泣、扶後起、杖後行、耳無聞、目無見。此足以喪天下。又弦歌鼓舞、習為声楽。此足以喪天下。又以命為有、貧富、寿夭、治乱、安危有極※矣、不可損※益也。②為上者行之、必不聴治矣。為下者行之、必不※従事矣。此足以喪天下。」

（『墨子』による）

（注）子墨子……戦国時代の思想家、墨子のこと。
程子……程繁のこと。儒者であったと言われ、本文より前の部分でも墨子と議論を交わしている。
喪……うしなう。ここではほろぼすこと。
天鬼……天と鬼。鬼はここでは死者の魂のこと。
厚葬久喪……葬儀を手厚くし服喪の期間を長くすること。
棺椁……二重になった棺おけ。「棺」は内側の、「椁」は外側のひつぎ。
徙……移動する。ここではにぎやかに引っ越しをすること。
損益……減らしたり、増やしたりすること。
聴治……政務を行うこと。
従事……仕事をすること。

問十四　傍線部①を書き下し文にせよ。

問十五　空欄には漢数字一字が入る。適切な漢数字を入れよ。

問十六　二重傍線部「命」と最も近い意味で「命」が用いられているものを以下の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　有顔回者好学、不幸短命死矣。
イ　賜不受命、而貨殖焉。億則屢中。
ウ　死生有命、富貴在天。
エ　使於四方、不辱君命。可謂士矣。

問十七　傍線部②について、

(1)　現代語に訳せ。

(2)　どういう理由でそうなると考えているか。「之」の内容を明らかにしながら簡潔に説明せよ。